

# 「サマーキャンプ in ぎふ2008」を終えて

## ～自然に身についた日本語と礼儀作法

米日教育交流協議会 代表  
丹羽 筆人

今年も日本の里山、岐阜県揖斐川(いびがわ)町を拠点に実施する日本語・日本文化体験学習プログラム「サマーキャンプ in ぎふ2008」(主催:米日教育交流協議会、共催:NPO法人校舎のない学校、NPO法人ぎふいび生活楽校など)が実施されました。7月2日から始まった第1期、7月23日からの第2期ともに各2週間は、比較的天候にも恵まれ、参加者たちは楽しく、有意義な日本語・日本文化体験ができたようです。

「サマーキャンプ in ぎふ」は、2006年から始まり、今年で3年目の実施となりました。3年間を振り返ってみますと、紆余曲折はあり、試行錯誤の連続でしたが、当初からの目的である日本語の学習意欲の向上、日本文化の体感という点においては、予想以上の効果を実現できたと喜んでいきます。

### 功を奏した体験型日本語学習

日本にある日本語学校で日本語を勉強したり、ホームステイをしたりして日本文化に触れるプログラムは数多くの団体が開催しています。しかし、そこでの日本語学習は、在米の日本語学校でもできることです。また、ホームステイは参加者にとっては楽しいのですが、日本のホストファミリーはお客様扱いの過剰なサービスをしがちです。また、ホストファミリーが英語の学習をしたいがために英語で会話するケースも目立ちます。これでは生きた日本語や日本の生活習慣を身につけるのは難しいでしょう。

「サマーキャンプ in ぎふ」では、「学校体験」の期間(4~5日間)を除くと、机上での日本語学習は一切ありません。すべて体験型学習です。2週間の実施期間中に組み込んだアメリカでは決してできない多彩な体験プログラムを通じて、日本文化を体感します。ホームステイは2週間の内の2泊3日です。ここでは、ホストファミリーに日常の生活を送っていただくようお願いしています。その他、廃校になった小学校を改修した宿泊施設「ラーニングアーバー横蔵」に集う地元のおじさんやおばさんが講師となって行われる木工や草木染などの各種体験や、地元の子どもたちとの交流活動も行います。そこでは当然ながら英語は通じません。従って、参加者たちは日本語を使わざるを得ないのです。

参加者には、アメリカで生まれ育ち、家庭でも英語を使う子どもも目立ちます。家庭で日本語を使っても、英語の方が得意な子どもがほとんどです。キャンプ初日の自己紹介では、日本語がすらすら話せない参加者が多く、指導者が投



げかける易しい日本語の質問が分からない子もいました。

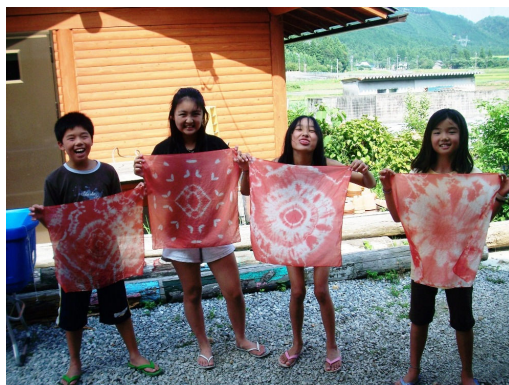
しかし、中日を過ぎ、2週間目に入ると、参加者の話す日本語は流暢になり、日本語を話さなかった参加者から日本語を聞くこともできるようになってきます。聞き取りは急激にスキルアップし、日本語での質問が分からないということが少なくなってきます。毎年このような子どもの急激な成長に感動しています。

### 生きた日本文化も体験

「サマーキャンプ in ぎふ」では、日本語のみでなく、日本文化の体験も同時に行っています。海外から来た人向けには、有名な神社や仏閣、城郭などの名所・旧跡を見学したり、書道や華道、茶道、歌舞伎や能楽などメジャーな伝統文化を体験したりするという企画はよくあります。しかし、「サマーキャンプ in ぎふ」では、昔ながらの生活習慣が残っている里山で、日常生活を通じて長年にわたって受け継がれた生きた日本文化を体験することができます。

NPO法人校舎のない学校の運営する築150年の古民家「かやぶきの家」での自炊生活では、自分たちで食事の準備や後片付けをすることにより、食べ物のおいしさや日ごろ食事の世話をしてくれる親のありがたさを感じられます。食材の買い物をするためには車で片道1時間以上の移動が必要という立地や、テレビやインターネットはもちろん、自動給湯システムやエアコンもなく、自分たちの日常生活とは比較できないほどの不便な環境において、快適に暮らす工夫をしたり、実はこの不便さが一番自然に優しい暮らしであることも感じたりすることができます。

軒下にたくさん張っている蜘蛛の巣は、実は部屋の中に入る虫を防いでいるということも学びます。この地域にはお店は



なくとも、地元の人が丹精込めて作ったおいしいお米や野菜があります。清らかな水の流れる小川で冷やしたスイカや麦茶は、ちょうど良い冷たさでおいしいことを実感できます。また、テレビやインターネットがない生活では、みんなで一緒に遊んだり、話したりすることが、もっと楽しいのだということを感じられたようです。

で見習い、自然に身につけるものなのだと、改めて子どもの吸収力を痛感しています。

このようなプログラムを通じて体験した日本的な礼儀作法の習得には、目を見張るものがありました。食事の後片付けは言われなくても自然に行うようになります。細かな点では、履物の脱ぎ方にも表れます。最初は部屋の内側に先端を向けて、それも左右ばらばらに脱ぎ捨てますが、ふと気がつくとほぼ全員が部屋の外側に先端を向けて左右そろえて脱ぐようになっています。また、あいさつもきちんと励行され、目上の人には頭を下げる姿勢もするようになります。さらに、敬語も聞こえてくるようになります。これらの言動は、同じ宿泊施設を利用する日本の子どもや大学生よりもきちんとしているくらいであり、大きな喜びを感じています。

### 日本的な礼儀作法も自然に身につけた

禅宗の寺院での宿泊体験では、自分たちで調理した精進料理を、ご住職のご指導をいただきながら食します。お茶碗やお椀、おかずの器の並べ方、箸の使い方、箸や食器の置き方、「いただきます。」というあいさつは



食材の命をいただくことを意味することなど

時半に起床して本堂や境内の掃除をし、朝食後には読経と座禅という禅寺修行の一端も体験しました。いつもなら、わいわいがやがやと黙ることを知らない子どもが、一言も発せず食事をしてるのが印象的でした。実は、ここはあの伊達政宗が梵天丸と称した幼少時代の学問の師、虎哉禅師が歴代住職に名を連ねる由緒あるお寺だということは、子どもはあまり分かっていなかったようです。

### さらに広がるニーズに合わせて

「サマーキャンプ in ぎふ」実施3年目は、海外生活の短い(3年以内)というような子どもや、日本で生活している子どもも参加しました。また、日本のインターナショナルスクールに在籍する子どもも初めて参加しました。日本語は問題なくできる子にとっても、日本文化体験プログラムは、有意義なものであると痛感しました。参加者層はこの3年間で大きく広がり、昨年は香港在住の子どもも参加しました。現在、アメリカやカナダのみでなく、台湾、フランスに在住する子どもや、アメリカンスクールに在籍する子どもの参加に関する問い合わせも受けています。日本人や日系人のみでなく、ご両親とも日本人以外で日本語や日本文化に興味ある方からの問い合わせも受けています。

さらに、スポーツクラブとの交流では、あいさつや礼儀、仲間との共同作業の大切さについても学んでいます。大きな声であいさつをすること、練習の準備や後片付けは部員が協力して行うこと、コーチの話を聞く時は目線を合わせるような姿勢をすること(コーチが座っていれば、立て膝を突く)、コーチや保護者など目上の人には礼を尽くす(頭を下げてあいさつする、イスを差し出すなど)ことなど、同年代のクラブの子どもたちが実践していることは、指導者が教えなくとも子ども同士

「サマーキャンプ in ぎふ」は、参加したいという方のニーズに合わせて、どんどん進化し、参加者を満足させ続けるプログラムでありたいと思います。つまり、参加者のニーズが作るプログラムを目指します。読者の皆様方、「サマーキャンプ in ぎふ」に関するご意見やご要望がありましたらぜひお知らせください。

なお、2009年のプログラム概要・参加要項は、2009年1月中旬に、米日教育交流協議会のウェブサイトで公表します。

### ◆お問い合わせ先

米日教育交流協議会(UJEEC)

Phone: 1-248-346-3818

Website: [www.ujeec.org](http://www.ujeec.org)



### 執筆/米日教育交流協議会(UJEEC)・代表 丹羽 筆人(NIWA, Fudehito)

河合塾で十数年間にわたり大学入試データ分析、大学情報の収集・提供、大学入試情報誌の編集に携わる。また、塾生の進学指導を行なう傍ら、高校での進学講演を通じて大学入試情報を提供。また、米国・英国大学進学や海外サマーキャンプなどの国際的企画も担当。米国移住後は、CA、NJ、NY州の補習校・学習塾講師を歴任。現在はデトロイト補習校講師。2006年に「米日教育交流協議会(UJEEC)」を設立し、日本での日本語・日本文化体験学習プログラム「サマー・キャンプ in ぎふ」など、国際的な交流活動を実践。さらに、2007年9月からは「河合塾海外帰国生コース 北米事務所」のアドバイザーとして帰国生入試情報提供と進学指導を担当。